小川未明文学館　館報

特別展
超大型紙芝居
『月夜とめがね』原画展　より

諸橋　精光／画

vol.16

小川未明文学館
新潟県上越市本城町８－30（高田図書館内）
ＴＥＬ　０２５－５２３－１０８３
ＦＡＸ　０２５－５２３－１０８６

小川未明文学館　館報　第16号
２０２２年（令和４）５月31日発行（年刊）

目次

【寄稿】
小埜　裕二氏「小川未明生誕１４０周年記念イベントについて」　２
【報告】
文学館１年の記録（令和３年度）　６
・展覧会　６
・各種イベント・講座等　８
・その他関連事業　９
・特別展　10
・特集展示　13
・文学館講座第１回　14
・文学館講座第２回　16
・文学館講座第３回
【小川未明文学賞】　17
【ボランティアネットワークだより】
「のばら」Vol.18　18
【文学館からのお知らせ】　20

小川未明生誕１４０周年記念イベントについて

小埜　裕二
（上越教育大学教授・小川未明文学館専門指導員）

今年は日本児童文学の礎を築いた小川未明の生誕１４０年にあたる。それを記念し、未明を愛する市民団体等で構成される小川未明連絡会議が中心となり、さまざまな事業を企画・実施することとなった。記念事業のスケジュールを年間を通じて紹介するイベントカレンダーや、内容の詳細な告知、イベントの様子等を伝えるホームページが作られた。

カレンダーには、関連イベントを含め、27のイベントが紹介されている。新企画の主なものを挙げると、4月の生誕祭、5月の詩碑・石塔除幕式と未明生家周辺散歩、7月の顕彰フォーラム、8月の子どもたちと読む未明童話、高田文化協会による童話朗読会、10月の春日山周辺散歩、11月の市民音楽劇、12月のシンポジウム等となる。文学館も、秋に生誕１４０周年記念展を行い、1月に未明童話アニメーション上映会、2月に文学館バックヤードツアーを開催する。上越文化会館による毎年恒例の小学生対象の読書感想文コンクールに加え、今年は一般対象の自由作文コンクールも行われる。昨年度から上越教育大学附属中学校の生徒による未明プロジェクトが進められ、11月の未明フェスティバルで成果の一端が発表される。

こうした未明の顕彰と研究の諸活動を通じ、不透明な社会を生きぬく糧がわずかでも提供できたら幸いである。記念事業の企画にあたって連絡会議が目標にしたのは、次の5点である。①未明の再評価、②生誕１５０年を見据えた集団作り、③市民グループ活動の総括、④活動の拡充、⑤地域振興。今回の記念事業が、10年後の生誕１５０周年を見据えたものとして意味をもち、持続可能なものとして拡充していくことを願っている。小川未明連絡会議によるイベントの企画・実施の後押しをしたのは、上越市文化振興課である。市の文化振興のため、常に全力で市民の活動等を支援してもらっている。

記念イベントの最初は、4月2日（土）の「生誕祭」であった。小川未明生誕の地碑前で献花式が行われ、町家交流館高田小町で記念スピーチ・記念講演が行われた。これまで生家跡地で生誕祭が行われたことはなかった。地元町内会とも連携し、碑前に献花と献酒を行い、生家隣の末裔丸山澄男氏及び作文コンクール受賞者、中学生の伊藤笑心さんから記念スピーチをいただき、記念講演が行われた。当日は生誕祭の会場に中川幹太上越市長が駆けつけて下さり、ご挨拶をいただいた。

「詩碑・石塔除幕式と生家周辺散歩」は5月7日（土）、生家旧畑地跡で開催された。未明の精神と功績を長く後世に伝えたいと願い、詩碑と石塔が建てられた。春日山神社境内に「雲

の如く高く」の詩碑があるが、今回の詩碑は、未明が70歳の古稀記念に揮ごうしたもので、春日山神社の詩碑と双璧をなすものである。石塔は、高円寺の未明家の庭に長年あったものを移築した。未明が毎日眺めていたものである。石塔は供養の意味がある。子供や両親を亡くした未明にとって重要なものであった。

除幕式は、上越市長中川幹太氏、小川家代表で詩人の小川英晴氏、幸町町内会長の高野恒男氏、石塔保管者である小島清介氏に曳綱と祝辞をお願いした。

詩碑の碑文は、「弱き者の為に立ち　代弁なき者のために起つ　我これを藝術の信條となす」である。未明がこの思いを抱くようになったのは、高田の地においてであろう。この地で見たもの、学んだもの、上杉謙信公や父母の影響もあった。

未明の代表作「赤い蠟燭と人魚」において、黙って売られていく人魚の娘のために、未明は大きな怒りの結末を用意した。碑文に表された未明の思いは本童話にも鮮やかに示されている。

今後は、詩碑・石塔を生誕地のシンボルとし、未明が目指した志の高い精神を市民に周知するとともに、未明の人と作品を敬愛する人をさらに増やし、未明文学を通じた人づくりを行い、上越の豊かな精神文化に対する市民の理解が深まる活動を継続的に拡充していきたい。

除幕式の後、未明生家周辺散歩が行われたが、この活動もまた、高田の町の歴史と先人が築いた豊かな精神文化を肌で感じ取るためのものであった。約40名の市民が集まり、関連地図と資料を頼りに、子供時代の未明が立ち、遊び、学び、見た、ゆかりの地がたどられた。こうした試みもこれまで無かったものである。

7月2日（土）には、顕彰フォーラムを開催する予定である。小川未明連絡会議は、上越の他の偉人を顕彰する団体等とネットワークを結びながら活動を充実させていく。小林古径、前島密、坂口謹一郎といった上越の偉人の顕彰グループの代表にご来席願い、顕彰活動の内容を話してもらうことで、小川未明の顕彰と研究の今後の示唆を得るとともに、フォーラムを行い、相互連携や協働のありかたについて考える。

未明の愛した郷土の人々が未明生誕１４０年に、一つのムーブメントを起こし、それが効力を発揮し、影響が波及していくことを願ってやまない。

未明生家旧畑地に建立された詩碑と石塔

イベントカレンダー（左）と
イベントの宣伝用チラシ

小川未明生誕140周年

Mimei Ogawa 140th anniversary

2022

雲の如く高く　くものごとくかがやき　雲のごとくとらわれず

各種イベントの詳細は、「小川未明文学館ホームページ」または「小川未明生誕140周年イベントホームページ」をご覧下さい。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点等から、イベントが中止、延期、縮小される場合があります。

小川未明生誕祭 140th

作家・小川未明は明治15(1882)年4月7日、上越市高田に生まれました。令和4(2022)年は、未明生誕140周年にあたります。未明生誕の地で、皆さんと一緒に未明生誕140周年のお祝いをしたいと思います。

プログラム

第１部　献花式「小川未明生誕の地」碑前にて（14:00～14:20）

1.開会
2.主催者挨拶
3.来賓祝辞
4.献花
5.献酒

第２部　案内板紹介「未明生誕の地」南側の空地にて（14:25～14:35）

田小町にて（15:00～16:00）

えたもの」

詩碑・石塔除幕式と未明生家周辺散歩

作家・小川未明は明治15(1882)年4月7日、上越市高田に生まれました。令和4(2022)年は、未明生誕140周年にあたります。それを記念し、未明生誕の地に、新たに詩碑を建立し、東京の未明家にあった石塔を移築します。その除幕式を行い、皆さんにご披露するとともに、未明生家周辺の文学散歩を行います。

プログラム

第1部　除幕式「小川未明生誕の地」碑南側の空地にて(14:00～14:40

1.開会
2.主催者挨拶 小川未明研究会代表　小埜裕二
3.除幕　中川幹太様(上越市長)　　小川英晴様(小川家代表)
　　高野恒男様(幸町町内会長)　小島清介様(石塔保管提供)
4.来賓祝辞　中川幹太様
5.来賓祝辞　小川英晴様
6.来賓祝辞　高野恒男様
7.来賓祝辞　小島清介様
8.閉会

第2部　未明生家周辺散歩(15:00～16:00)＊雨天延期

生家～漢学塾跡～金光寺～本覚寺～鐘楼跡～銭湯～浅堀跡(予定)

＊長い距離を歩くものではありません。のんびりした周辺散歩です。

日時:2022年5月7日(土)14時～16時

開催場所:「小川未明生誕の地」碑(上越市幸町2-10)の南側空地及び幸町周辺　＊雨天の場合、除幕式後、町家交流館高田小町で生家周辺散歩の机上学習を行います。

●加費:500円(生家周辺散歩に参加される方のみ。飲み物・資料代)

定員:20名(申込順・生家周辺散歩に参加される方のみ)

＊除幕式は申込不要、どなたでも参加できます。

申込:3月8日(火)から4月30日(土)までに、小川未明文学館(025-523-1

新型コロナウイルス感染症拡大防止の取り組み:参加時は、マスク着用で

状況によっては、イベントを縮小あるいは中止とする場合がございます。

主催:小川未明研究会

交通アクセス:えちごトキめき鉄道　高田駅から徒歩15分、上越自動車道ジから車で20分、北陸自動車道　上越インターチェンジから車で20分

問合わせ:小川未明文学館(同上)、小川未明研究会(yuji@juen.ac.jp)

小川未明顕彰フォーラム

作家・小川未明は明治15(1882)年4月7日、上越市高田に生まれました。令和4(2022)年は、未明生誕140周年にあたります。それを記念し、小川未明顕彰フォーラムを開催いたします。郷土の偉人小林古径・坂口謹一郎・前島密の顕彰活動の様子をゲストの方にうかがいながら、ネットワークを活かした今後の小川未明顕彰のありかたを探ります。

プログラム

開会・主催者挨拶 (13:00～13:05)　小川未明研究会 代表　小埜裕二

第1部　上越の偉人たちの顕彰に学ぶ(13:05～14:05)

1　小林古径　　小林古径記念美術館 統括学芸員　笹川修一氏
2　坂口謹一郎　　発酵学の父 坂口謹一郎顕彰会 幹事　光永伸一郎氏
3　前島密　　郷土の偉人“前島密翁”を顕彰する会 会長　堀井靖功氏

第2部　小川未明の顕彰活動(14:15～15:00)

1　小川未明文学館 学芸員　上村聡子
2　小川未明研究会 代表　小埜裕二
3　小川未明連絡会議

第3部　顕彰フォーラム(15:15～16:00)

司会　　小埜裕二
パネリスト　笹川修一氏　光永伸一郎氏　堀井靖功氏　他

閉会

日時: 2022年7月2日(土)13:00～16:00　開場12:30
場所: 上越文化会館　中ホール　(上越市新光町1丁目9-10　TEL025-525-4103)
参加費: 無料
定員: 100名(申込順)
申し込み: 6月7日(火)から6月24日(金)までに、小川未明文学館(025-523-1083)へお電話下さい。(小川未明生誕140周年記念イベントHPからもお申込みいただけます。)
新型コロナウイルス感染症拡大防止の取り組み: 参加時は、マスク着用でお願いします。感染拡大状況によっては、イベントを縮小あるいは中止とする場合がございます。
主催: 小川未明研究会、小川未明連絡会議、上越市
交通アクセス: 電車　えちごトキめき鉄道はねうまライン春日山駅下車徒歩4分
　車　北陸自動車道上越ICより約5分　上信越自動車道上越高田ICより約15分
問い合わせ: 小川未明文学館(同上)、小川未明研究会(yuji@juen.ac.jp)

小川未明生誕140周年 イベントカレンダー

青字は100名以上の参加が見込まれるイベント／赤字はコンクール／緑字は参加者数の見込みが100人未満のイベント

未明生誕祭
未明生誕の地にある「小川未明生誕の地」碑前で献花式を行った後、記念講演を行います。／日時：4月2日（土）14時～16時（雨天開催）／場所：「小川未明生誕の地」碑前・町家交流館高田小町／定員（高田小町での行事参加）：35名（申込順・無料）

詩碑・石塔除幕式と未明生家周辺散歩
未明生誕の地（旧畑地）に新たに設置する詩碑と石塔の除幕式を行った後、未明生家周辺の散歩を行います。／日時：5月7日（土）14時～16時（除幕式は雨天開催、周辺散歩は雨天延期）／場所：「小川未明生誕の地」碑南側空地・未明生家周辺／定員（周辺散歩への参加）：20名（申込順・有料）

小川未明文学館こども祭
子どもたちが文学館に親しむ機会を提供することを目的に、小川未明文学館でこども祭を開催します。／時期：5月14日（土）（予定）／場所：小川未明文学館／予約不要・無料

朗読研修会
次世代を担う子どもたちの心を育むことを目的に、全3回の朗読研修会を開催します。あわせて朗読活動に係る知識・技能の向上を図ります。／時期：6月、7月（予定）／場所：未定／定員：未定（申込順・無料）

童話創作講座
未明の文学精神を次代に継承することを目的に、全3回の童話創作講座を開催します。／時期：7月、9月（予定）／場所：未定／定員：未定（申込順・無料）

「文芸たかだ」誌の発行
令和4年5月、7月、9月、11月、令和5年1月、3月（年6回）発行の「文芸たかだ」誌に、未明に関するエッセイ、詩、短歌、俳句等を掲載します。また、表紙には未明にまつわる絵を市内高校の美術部生徒さんに描いてもらいます。

小川未明文学館おはなし会
未明ボランティアネットワークの朗読ボランティアの皆さんが文学館ビッグブックシアターで小川未明作品の朗読を行います。／時期：毎月第2･4日曜日14時～／場所：小川未明文学館／予約不要・無料

小川未明研究会オープンデイ
小川未明研究会を一般公開します。興味をお持ちになられた方は、研究会にご参加下さい。（5月の未明生家周辺散歩が雨天順延された場合、この日に周辺散歩を行います。）／日時：6月4日（土）14時～16時／場所：町家交流館高田小町／予約不要・無料

小川未明顕彰フォーラム
上越の偉人（小林古径、前島密、坂口謹一郎）の顕彰活動の様子をゲストに話してもらった後、未明顕彰のありかたについて話し合います。／日時：7月2日（土）13時～16時／場所：上越文化会館中ホール／定員：100名（申込順・無料）

小川未明童話朗読会
未明童話の朗読会を開催します。8月は大越さとみさん、9月は篠田澄明さんが朗読します。／日時：8月27日（土）14時～15時30分、9月17日（土）14時～15時30分／会場：高田まちかど交流館（8月）、未定（9月）／要予約・有料

読書感想文コンクール
童話「黒い人と赤いそり」をテーマに、読書感想文コンクールを開催します。優秀作は小川未明フェスティバル2022において表彰します。／応募資格：県内小学生／募集期間：7月～9月

自由作文コンクール
「小川未明」をテーマに、自由作文コンクールを開催します。優秀作は小川未明フェスティバル2022において表彰するとともに、未明生誕140周年記念文集として小川未明文学館ＨＰに掲載します。／応募資格：中学生～大人／募集期間：7月～9月

子どもたちと読む未明童話
子どもたちを対象に未明童話に親しむ会を開催します。全2回。あわせて小川未明フェスティバル2022のテーマ童話をもとに読書感想文を書きます。／対象：県内小学生／日時：8月6日（土）、13日（土）10時～11時30分／場所：町家交流館高田小町／定員：20名（申込順・無料）

上越教育大学附属中学生による未明プロジェクト
「岩手の中学生と郷土の作家の魅力を伝え合おう」「未明作品を劇化しよう」(仮)等の公開授業。代表グループが小川未明フェスティバル2022で発表します（予定）。未明プレゼン動画の上映、デジタルパンフレットの掲示も予定。／時期：6月～11月

上越教育大学公開講座「未明文学の再発見」
未明文学を、新たな角度から捉え直す3回シリーズ。現代を生きる私たちに必要な課題と関連づけながら考えます。／講師：小埜裕二／日時：9月3日（土）、17日（土）、24日（土）14時～16時／場所：町家交流館高田小町／定員：20名（抽選・有料）

未明春日山周辺散歩
未明が15歳頃に移り住んだ春日山神社周辺の文学散歩を行います。／日時：10月1日（土）14時～16時（雨天順延）／場所：春日山神社周辺／定員：20名（申込順・有料）

文学館講座
未明文学の世界を深く追求する文学館講座です。講師は未明を知るスペシャリスト3名をお招きします。／時期：10月～12月（全3回）／場所：未定／定員：30名（抽選・無料）

小川未明生誕140周年記念展
文学館が所蔵する貴重資料などをもとに、新しい研究成果もふまえながら、未明の生涯と業績をトータルに紹介します。／時期：10月～12月／場所：小川未明文学館／無料

小川未明生誕140周年記念展おはなし会
小川未明文学館の特別展の開催期間中に、小川未明ボランティアネットワークに所属する各グループが未明作品の朗読を行います。／時期：10月／場所：小川未明文学館／予約不要・無料

特集展示
文学館が所蔵する貴重資料を活用したミニ特集展示を行います。年4回。／時期：特集展示①4月22日（金）～、②7月22日（金）～、③10月28日（金）～、④令和5年1月26日（木）～、／場所：小川未明文学館／予約不要・無料

小川未明研究会オープンデイ
小川未明研究会を一般公開します。興味をお持ちになられた方は、研究会にご参加下さい。（10月の春日山周辺散歩が雨天順延された場合、この日に文学散歩を行います。）／日時：11月5日（土）14時～16時／場所：町家交流館高田小町／予約不要・無料

小川未明フェスティバル2022
毎年恒例の小川未明フェスティバル。今年のテーマは「黒い人と赤いそり」。読書感想文・自由作文コンクールの表彰、創作フラメンコ等の公演予定。／日時：11月26日（土）14時～17時／場所：上越文化会館中ホール／チケット制・有料

小川未明市民音楽劇「月の明るい夜に」
出演者は市民、脚本は劇団四季やディズニー映画の和訳などで活躍する著名な作家が担当、作曲、舞台監督、照明、音響など一流のスタッフが出演者をカバーする市民音楽劇。／日時：11月27日（日）／場所：上越文化会館大ホール／チケット制・有料

未明生誕140周年記念シンポジウム
未明文学を新しい角度からとらえ直すことを目的に、5名の専門家を招き、未明文学の新しい世界について話し合います。／日時：12月17日（土）13時～16時／場所：オーレンプラザ／定員：100名（申込順・無料）

未明童話アニメーション上映会
子どもたちに未明童話に親しんでもらうことを目的に、小川未明文学館ビッグブックシアターで、文学館が所蔵する未明童話のアニメーションを上映します。／時期：1月（予定）／場所：小川未明文学館／予約不要・無料

小川未明文学館バックヤードツアー
小川未明文学館をより深く知ってもらうことを目的に、普段は見られない収蔵庫や、未明自筆原稿など文学館所蔵の貴重資料を見ることのできるツアーを開催します。／時期：2月（予定）／場所：小川未明文学館／定員：20名（申込順・無料）

小川未明文学賞贈呈式
上越市と小川未明文学賞委員会が主催する第31回小川未明文学賞の贈呈式を開催します。／時期：3月（予定）／場所：小川未明文学館（予定）

※上記イベントには、生誕140周年記念イベントの他、関連イベントも含まれています。
※各種イベントは、「広報上越」等を通じてもご案内いたします。予約先や予約開始日等は、「小川未明文学館ホームページ」又は「小川未明生誕140周年イベントホームページ」にてご確認ください。
※新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点等から、イベントが中止、延期、縮小される場合があります。
※問い合わせ先　小川未明研究会　メール：yuji@juen.ac.jp　／小川未明文学館　電話：025-523-1083

小川未明文学館HP

小川未明生誕140周年イベントHP

◆文学館1年の記録◆

2021年度は、20190人の方にご来館いただきました。

【展覧会】

特別展を2回、特集展示を4回開催しました。

特別展〈第29回小川未明文学賞受賞記念展〉

〈会期〉4月1日～4月25日
〈会場〉文学館市民ギャラリー
〈来場者〉1036人

✍第29回小川未明文学賞の応募作品546編の中から選ばれた、大賞・優秀賞の受賞者の声とその作品を紹介しました。また、文学館で開催された贈呈式の様子、これまでの大賞受賞者とその作品、今回の最終選考まで残った作品の講評、書籍化された第28回大賞受賞作品『ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き―シャ・キ・ペシュ理容店のジョアン―』の校正原稿（学研プラス提供）などを紹介しました。

〈超大型紙芝居『月夜とめがね』原画展〉

〈会期〉10月9日～12月5日
〈会場〉文学館市民ギャラリー
〈来場者〉3674人

✍絵本・紙芝居作家の諸橋精光さんが描いた紙芝居『月夜とめがね』（平成31年4月　鈴木出版）の原画を展示し、子どもたちに未明童話に親しんでもらいました。

本展覧会では、1点が90cm×130cmの大きさがある原画19点を展示。あわせて、各時代の「月夜と眼鏡」の挿絵を書籍や雑誌、絵本で紹介しました。

また、関連イベントとして10月24日、未明ボランティアネットワークの協力による特別展おはなし会を開催し、34人の方からご参加いただきました。

（詳細は【報告】特別展9頁に掲載）

特集展示

これまで小川未明文学館では、未明に関する雑誌や書籍、関連資料など、さまざまな資料を収集してきました。これらの所蔵資料を活用した特集展示（テーマ展示）を定期的に開催することにより、小川未明の作品や業績、人となりについて紹介しています。

（詳細は【報告】特集展示10～12頁に掲載）

【各種イベント・講座等】

小川未明文学館こども祭

〈開催日〉5月8日
〈参加者〉105人

✍子どもたちに未明童話や文学館に親しんでもらうため、こども祭を開催しました。

テーマを、未明の代表作であり、発表からちょうど100年を迎えた童話「赤い蝋燭と人魚」とし、LEDキャンドルを使用したろうそく作り・文学館で配布している未明童話冊子を綴じるための表紙作りを楽しんでもらいました。

また、未明と「赤い蝋燭と人魚」に関するクイズや、常設展示室内に隠された、さまざまな大きさや材質で作られためがねを探すことにチャレンジしました。

朗読研修会

〈開催日〉6月26日・7月3日・7月17日の全3回
〈会　場〉高田城址公園オーレンプラザ研修室
上越市市民プラザ第3会議室
〈参加者〉30人

✍橘由貴氏（朗読療法士・ヴォイスアーティスト）を講師に、朗読研修会を開催しました。

はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習の大切さを学び、「心に響く朗読をするには」という講義に耳を傾けました。次に発声練習や開口訓練を行い、その後、未明童話「角笛吹く子」（大正10年）、「夏の晩方あった話」（昭和10年）を題材にした実践的な朗読で、講師から個々に指導を受けました。また、講師の朗読を聴き、受講者の今後の朗読練習の参考にしました。

童話創作講座

〈開催日〉7月10日・9月4日・9月11日の全3回
〈会　場〉高田図書館第1会議室
〈参加者〉11人

✍佐々木赫子氏（児童文学作家）を講師に、短編童話の書き方を学びました。

1回目の講座では、事前に受講者が創作した童話の講評を講師からしていただきました。2回目・3回目の講座では、アドバイスを受け手直しした作品の講評をいただき、さらに、受講者同士でお互いの作品について意見を交換しあい、今後の創作の参考にしました。

受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや市立図書館で読むことができます。

文学館講座

〈開催日〉10月16日・11月7日・11月13日
〈会　場〉文学館市民ギャラリー
高田城址公園オーレンプラザ研修室
〈参加者〉延べ97人

✍未明や作品について学ぶ講座を開催しました。講師は、第1回 諸橋精光氏（千蔵院住職、絵本・紙芝居作家）、第2回 遠山光嗣氏（新美南吉記念館館長）、第3回 小埜裕二氏（上越教育大学教授、小川未明文学館専門指導員）におつとめいただきました。

（詳細は【報告】文学館講座13～16頁に掲載）

文学館おはなし会

〈日　時〉毎月第2・4日曜日 午後2時～
〈会　場〉文学館ビッグブックシアター
〈参加者〉延べ223人

✍未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力により未明童話を中心としたおはなし会を21回開催しました。

出張おはなし会

✍未明童話に出会う機会をより多くの子どもたちに提供するため、未明ボランティアネットワークの協力により、市内の小学校に朗読ボランティアが出向いて、おはなし会を開催しました。

2021年度は、市内小学校12校（615人）、放課後児童クラブ9か所（267人）を訪問しました。

こどもプログラム　未明童話と親しもう
―こどもたちに届けたい未明のメッセージ―

✍未明童話といえば「赤い蝋燭と人魚」、「月夜と眼鏡」などが有名ですが、このほかにも素晴らしい童話が数多くあります。これらを子どもたちに読んでもらうために、月替わりで未明童話1作品を冊子にして無償配布しました。配布作品は、幼児から小学校の低中学年向けの童話が中心となっています。参加者にはおはなしカードを配布し、集めたシール数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。2021年度は、延べ649人に冊子を配布しました。

〈配布童話〉
・4月「花とあかり」
（初収録『小豚の旅』昭和10年5月）
・5月「ひばりのおじさん」
（初出『せうがく三年生』昭和13年6月）
・6月「雨」
（初収録『小豚の旅』昭和10年5月）
・7月「うさぎと二人のおじいさん」
（初収録『未明童話集3』昭和3年7月）
・8月「夏の晩方あった話」
（初収録『小豚の旅』昭和10年5月）
・9月「秋の野」
（初出『コドモアサヒ』昭和8年9月）
・10月「おかめどんぐり」
（初収録『小豚の旅』昭和10年5月）
・11月「柿」
（初出『コドモアサヒ』昭和8年10月）
・12月「おおかみとチョコレート」
（初出『スキート』昭和8年12月）
・1月「雪にうずもれた小学校」
（初出『コドモアサヒ』昭和8年12月）
・2月「こたつにはいって」
（初収録『小川未明コドモエバナシ』昭和10年1月）
・3月「こうさぎとははうさぎ」
（初出『小学一年生』昭和26年1月）

未明童話のぬり絵

✍文学館の「出会いのロビー」では、いつでも数種類の未明童話のぬり絵をご用意しています。小さなお子さんから、高校生・大人の方まで、大勢の方に楽しんでいただいています。ぬった絵はロビーの掲示板に展示しています。

【その他関連事業】

小川未明連絡会議合同イベント
〈未明童話の世界を感じよう〉

〈開催日〉11月28日
〈会　場〉上越文化会館

✍「小川未明フェスティバル2021秋編」（上越文化会館主催）の開催にあわせて、小川未明連絡会議構成団体による合同イベントを行いました。

当館では「出張小川未明文学館」として、未明紹介パネルやフェスティバルのテーマである「夏の晩方あった話」の解説パネルの展示、未明関連資料の読書コーナーの開設を行いました。

また、小川未明研究会（小埜裕二氏代表）によるTシャツやクリアファイルなどの未明オリジナルグッズの販売、高田文化協会による「夏の晩方あった話」にちなんだ「紙芝居がはじまります」と題した絵の展示がありました。

未明ボランティアネットワークは、「夏の晩方あった話」のパネルシアターを3回上演したほか、未明童話の手作り小冊子の配布を行いました。

令和3年度特別展
超大型紙芝居
『月夜とめがね』原画展

〈会期〉10月9日～12月5日
〈会場〉文学館市民ギャラリー

長岡市の真言宗豊山派千蔵院住職で、絵本・紙芝居作家の諸橋精光さんが描いた紙芝居『月夜とめがね』（平成31年4月　鈴木出版）の原画19点を展示しました。

諸橋さんは、新潟県長岡市に生まれました。28歳頃より仏教説話を中心とした絵本・超大型紙芝居の制作を始め、平成5年『なめとこ山のくま』（童心社）で高橋五山賞を受賞、平成14年「えにかいたねこ」でボローニャ国際絵本原画展に入選。絵本・紙芝居の出版多数。現在、寺務のかたわら制作を続けています。

段ボールに描かれた原画は1点が90㎝×130㎝の大きさがあり、見る人を童話の世界に引き込んでくれます。

あたたかいタッチで描かれた美しい絵と、幻想的な未明の童話をお楽しみいただきました。

来場者からは、「絵が重厚で温かみがあり、久しぶりに心が豊かになりました」「大きな原画でインパクトがありました。段ボールに描いてあるなんて驚きました」など、多くの感想が寄せられました。

■「月夜と眼鏡」について

未明童話「月夜と眼鏡」は大正11年7月、当時大流行していた『赤い鳥』に掲載されました。『赤い鳥』は鈴木三重吉が大正7年に創刊した童話雑誌で、未明は「飴チョコの天使」「金魚売」などの童話42編、童謡2編を発表しています。

「月夜と眼鏡」は、未明の代表作として多くの童話集におさめられ、昭和・平成・令和と、さまざまな画家たちによって絵をつけられ、出版されています。

『赤い鳥』９巻１号
赤い鳥社　大正11年７月
清水良雄/画

〈あらすじ〉

おだやかな月のいい晩、おばあさんが針仕事をしていると、そこにやってきたのはめがね売りでした。針の穴に糸が通らなくて困っていたおばあさんは、「なんでもよく見えることうけあい」のめがねを買います。するとまた、戸をたたく音がしました。そこに立っていたのは、石につまずいて指を傷つけたという女の子でした。傷口を見るためにおばあさんがめがねをかけると…。

特集展示

特集展示1
〈新収蔵品展 ―令和2年度収集資料―〉

〈会期〉4月9日～7月14日
〈会場〉文学館常設展示場

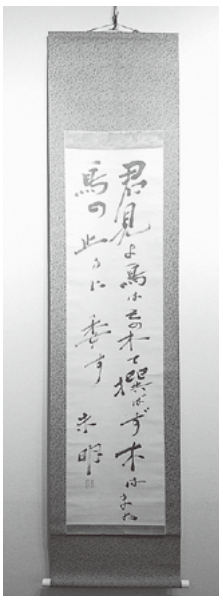
小川未明文学館では、未明に関する資料の収集や調査を行い、それらを公開することにより未明の業績を広く紹介していきたいと考えています。

本展では、令和2年度に新たに収蔵した資料の中から、未明の初出童話が掲載された絵雑誌や、近年発行された未明に関する資料などを紹介しました。

また、令和2年度に市民からご寄贈いただいた未明自筆書軸

「君見よ　鳥はその木を撰ばず　木はまた鳥の止るに委す　未明」

を展示しました。これは、上越市上正善寺から出土した考古遺物を譲ってもらったお礼に、未明が贈ったものです。



未明童話「徒競走」初出誌
『子供之友』21巻11号
婦人之友社　昭和９年11月

特集展示2
〈「赤い蝋燭と人魚」の１００年〉

〈会期〉7月16日～10月27日
〈会場〉文学館常設展示場

２０２１年は、未明童話の代表作の一つである「赤い蝋燭と人魚」が発表されてから、ちょうど１００年にあたります。

「赤い蝋燭と人魚」は大正10年、『東京朝日新聞』に2月16日～20日の5回にわたって掲載されました。〝新童話〟と書かれ、岡本一平の挿絵がつけられました。未明が子どもの頃に祖母から聞いた上越の民話がモチーフのひとつとされ、直江津の郷津海岸が風景のモデルのひとつとされるこの童話は、どのような状況の中で書かれたのでしょうか。

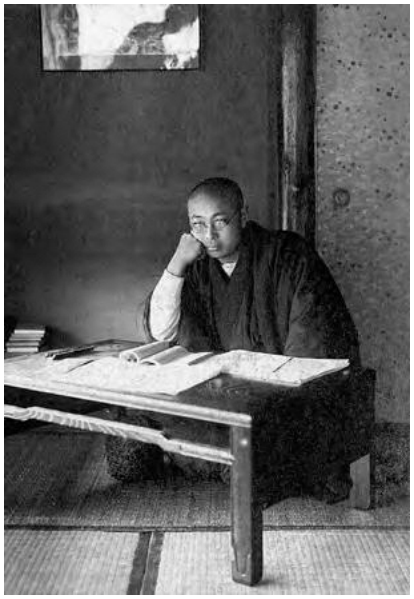
大正10年は、世界で１６００万人とも言われる死者を出した第一次世界大戦が2年前に終結し、前年には戦後恐慌が起こった年です。不況が続き、貧しい人々は大変厳しい状況にありました。理想の社会を求め、アナキズム（無政府主義）に傾倒していた未明は、かねてから交友のあった大杉栄らが結成した日本社会主義同盟の発起（大正9年12月）に参加しています。

また、大正7年から世界中でまん延していた流行性感冒（スペイン風邪）が日本を襲い、多くの患者と死者を出していました。未明一家も大正9年1月、37歳の未明をはじめとして、妻キチ、次女鈴江（6歳）、次男哲郎（3歳）の全員が感染しました。一時は危篤状態に陥った未明でしたが、回復後は精力的に作品を発表しつづけます。そして「赤い蝋燭と人魚」の発表と同じ大正10年2月には三男英二が生まれました。新しい命の誕生に力を得た未明の大正10年の発表作は、童話40編、小説24編、感想・アンケート42編に及びました。

「赤い蝋燭と人魚」は多くの人に愛され、大正・昭

和・平成と多くの童話集に収められて、いろいろな画家の手によって挿絵が描かれてきました。舞台化や音声化もされ、令和の時代になっても、国語の先生が選ぶ〝子どもたちに読んでもらいたい作品〟として紹介されています。本展では、「赤い蠟燭と人魚」が収められた童話集や紙芝居などを展示しました。

紙芝居『赤い蠟燭と人魚』新井五郎/画
日本画劇　昭和24年６月



「赤い蠟燭と人魚」
発表の頃の未明
（大正10年２月28日）

『Une sirène chez les hommes』（フランス語）
酒井駒子/画
Ecole Des Loisirs　平成21年10月

特集展示3
〈小川未明と坪内逍遥〉

〈会期〉10月29日～1月28日
〈会場〉文学館常設展示場

明治34年4月、試験に合格した小川未明は、東京専門学校（翌年から早稲田大学に改称）に入学します。坪内逍遥をはじめ、ラフカディオ・ハーンなど一流の講師陣に学び、片上伸・吉江喬松らの友人に恵まれました。

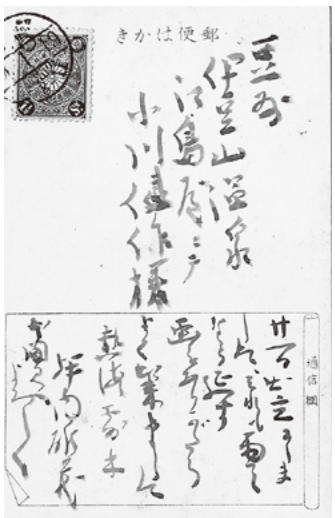
明治36年5月、華厳の滝で投身自殺した第一高等学校生・藤村操の遺書「巌頭之感」に対する感想を書いた未明の文章が逍遥の目にとまり、未明は逍遥の自宅で毎月開かれていた「読書研究会」に参加するようになりました。研究会に出席しているうちに創作を志した未明は、逍遥に作品の指導添削を受けるようになります。

そして明治37年9月、逍遥の紹介で雑誌『新小説』に小説「漂浪児」を発表。逍遥から「未明（びめい）」の筆名を与えられ、文壇にデビューしました。「ビメイ」という筆名について、後に未明はこう書いています。「（逍遥が）『ゲエテは美は黄昏にあるといつたが、黄昏では果てがないやうな気がするから、同じ薄明でも夜明けにしたらどうか。未明がよからう』と言はれて、私は喜んでその名前をいただきました」（「童話を作つて五十年」昭和26年）

逍遥は大正9年に静岡県熱海に双柿舎と呼ばれる住居を構え、昭和10年に亡くなるまでそこで過ごします。逍遥が熱海に移ってからの二人の交流については定かではありませんが、未明が昭和16年と昭和26年に、熱海にある逍遥の墓を訪れている写真が残されています。逍遥の死後も、未明が逍遥を師と慕っていることが読み取れる一枚です。

未明と恩師・逍遥の交流を、逍遥が未明に宛てたはがきや写真などでご紹介しました。

「読書研究会」会員一同（明治38年７月）
前列左から３番目が逍遥、後列左から６番目が未明



逍遥が未明に宛てたはがき
（明治44年１月19日）

熱海にある逍遥の墓前に手を合わせる未明
（昭和26年５月）

特集展示４
〈100年前の未明小説〉

〈会期〉２月１日～４月20日
〈会場〉文学館常設展示場

100年前の大正10年、小川未明は実に107作に上る小説、童話、随筆等を書きました。

貧しさのため、感染症で大正３年に長男哲文を６歳、大正７年に長女晴代を11歳で亡くした未明は、大正10年発表の作品にもそのことを繰り返し書いています（「死刑囚の寫眞」「すべてが美しく」等）。それは、子どもを自分の仕事の犠牲にしてしまったという後悔であったり、子どもの分も精一杯生きなければという決意であったりします。

また、理想の社会を求めてアナキズム（無政府主義）に傾倒し、かねてから交友のあった大杉栄らが結成した日本社会主義同盟の発起（大正９年12月）にも参加していた未明は、社会の改造を願い、自らの使命として貧しい者・社会的弱者の目線で書かれた小説を多く発表しました（「老旗振り」「顔を見た後」等）。

ふるさと高田や、自身の子どもの頃の思い出を書いた作品も多く見受けられます（「片目になつた話」「冷酷なる記憶」「青く傷む風景　夏の小品」「眠つてゐるような北国の町　私の郷里」等）。子ども時代を懐かしく振り返り、自然が輝いていたこと、今はすっかり変わってしまった町のことを語っています。

これらと並行して、童話の名作も次々と生み出されました（「時計のない村」「殿さまの茶わん」「赤い蝋燭と人魚」「角笛吹く子」「港に着いた黒んぼ」等）。

本展では、大正10年に発表された未明作品の中から、小説の初出誌を中心に、その内容をご紹介しました。

文学館講座（講座要旨）

第1回
超大型紙芝居『月夜とめがね』制作の周辺

講　師：**諸橋精光氏**（絵本・紙芝居作家　真言宗豊山派千蔵院住職）
開催日：令和3年10月16日（土）
会　場：小川未明文学館市民ギャラリー

■絵を描くようになったきっかけ

子どもの頃、体が弱かったのですが、漢方薬が効いて元気になりました。もともと絵を描くのが好きだったので、小学校6年生の頃には紙をたくさん繋げて絵巻物みたいなものを描いていました。中学に入ると少女漫画に興味が出て一生懸命描きましたが、高校生の頃、絵の先生についてデッサンの勉強を始めました。どんどん絵の世界がおもしろくなり、美術の学校に入りました。そのまま絵描きになりたかったのですが、お寺を継ぐ約束だったので、今度は大学で仏教の勉強をしました。仏教は2500年の歴史があって、人間の心や知恵を学ぶことができる。なんておもしろいんだろうと思いました。

絵と仏教を両立させようとしましたが、私の寺は非常に忙しい寺で、なかなか大きな絵は描けない。そんな中で絵本作りを始めました。お彼岸、お盆って何？なんで手を合わせるの？そういうことをきちんと伝える方法として、月に一冊小さな絵本を作って、お堂に置きました。30年間で300冊。毎月やっているうちに、絵本を作る腕力がついたのだと思います。『仏教説話大系』全40巻（鈴木出版）からお話をとりました。

■大型紙芝居誕生

私は子どもが好きで、子どもをお寺に集めて何かやりたいと思いました。夏に子ども祭を催し、針の山や血の池地獄を描いた大きな紙芝居を作って演じました。お寺の太鼓や銅鑼などの鳴り物入りで、語りや効果音によって子どもたちの目が釘付けになりました。子どもたちのために始めた紙芝居制作でしたが、私自身が引き込まれていきました。自分の絵が、150％にも200％にも広がる感じがして、毎年作るようになりました。

■児童文学の紙芝居へ

最初の5年くらいは、『仏教説話大系』の中から選んで、仏教の紙芝居を作っていました。ある時声優の右手和子（うて）さんと出会い、私の作品を気に入っていただいて、色々な所で紙芝居を演じていただくようになりました。右手さんの語りは実に深く、それに対して自分の絵の表現の力不足に愕然としました。もっと深い表現がしたいと思い、児童文学に向かうようになりました。大系の中に花岡大学が選んだ仏教童話集があって、宮沢賢治の「なめとこ山のくま」が載っていました。紙芝居の脚本の大家で、賢治の研究家でもある堀尾青史さんに見てもらいたいと必死に制作しました。もう30年くらい前のことです。同じ童話集に未明の「月夜とめがね」も収録されていましたが、それを描く技量がまだ足りないと思い宿題にしていました。その後、新美南吉の「ごんぎつね」、賢治の「セロ弾きのゴーシュ」や「やまなし」などを制作しました。

■「月夜とめがね」の制作

まだ描けないと思っていた「月夜とめがね」でしたが、体力があるうちにと5年ほど前に取りかかりました。未明の、夜の月の光に照らされた花園の香りがしてくるような文章。脚本化するために、言葉を調整したり、わかりやすく変えてみたりしたけれど、全部拒否される感じがしました。女性的な優しいお話なのに、土台はものすごく男性的な太い骨格があり、緻密に作られているので、文章を変えるなどの逸脱を許さない緊張感がある。とても魅力を感じながら制作することができ、幸せでした。

月夜の花園をおばあさんが女の子を連れて歩くところは、一番描きたかった場面です。でもその次の場面で、どうにも描けなくなりました。そんな時は、画家でもある妻に一度絵を壊してもらいます。描き直してもらうのではなく、壊してもらう。自分ではもったいなくて壊せないんです。妻が上から青の絵の具をバーッと塗ったことにより、細かい所を描きすぎて表現がバラバラになっていたことがわかりました。そこから描き起こし、気に入った場面になりました。

段ボールのザラザラを使って描く技法は妻から教わったものです。空間の奥行き、空気の振動を表現するためには単調に色を塗るだけではだめで、ザラザラを使って塗ることにより立体感が出る。要

のところは妻との共作と言っていいと思います。

■おわりに

使っている絵の具はネオカラーです。非常に色が強くて、遠くから見てもはっきりわかる。絵に力を持たせることができるネオカラーと、段ボールのザラザラした素材の出会いによって、絵が見る人の目に飛び込んでくるような表現ができます。未明の「金の輪」の光を、この絵の具で描いたらいいんじゃないか。いつか制作したいと思っています。

第2回 新美南吉記念館における市民協働の成果と課題

講　師：**遠山光嗣氏**（新美南吉記念館館長）
開催日：令和3年11月7日（日）
会　場：高田城址公園オーレンプラザ

■新美南吉について

南吉は、大正2年に愛知県知多郡半田町岩滑（やなべ）（現・半田市）に生まれました。未明の次女の鈴江さんと同い年、未明とは31歳差になります。本名は渡辺正八ですが、8歳の時に生母の実家である新美家の養子となりました。非常に秀才で、半田中学（現・半田高等学校）に入学後盛んに童謡や童話を作るようになります。母校の小学校の代用教員を経て、東京外国語学校（現・東京外国語大学）英語部文科に入学。この間、童謡雑誌『チチノキ』に加入し、巽聖歌と知り合いました。北原白秋に弟子入り、「ごん狐」が『赤い鳥』に掲載されたのもこの頃です。20歳で喀血し、23歳で2度目の喀血。その後帰郷し、小学校の代用教員等を経て、安城高等女学校（現・安城高等学校）の教諭として勤務しながら童話をたくさん書きましたが、昭和18年3月喉頭結核のため永眠しました。29歳でした。

南吉作品の特徴としては、

・物語性がある。
・子どもの心理描写が巧みである。
・郷土性が豊かである。

ことがあげられます。

■新美南吉と小川未明

南吉は14歳の時、未明の童話集である『日本童話集（中）』（昭和2年　アルス）を読みました。「感ずる所があった。」「月と海豹」は、大きな或物を私に与えた。童話を四つ考えた。」と日記に綴り、大きな影響があったことが伺えます。

■ふるさと半田

半田市の名物を、「山車・蔵・南吉・赤レンガ」と称しています。市内に31輌ある山車は、各地区の春の祭礼で曳き回されます。南吉も岩滑の義烈組に所属していました。祭を描いた童話「狐」や詩を書いています。半田は江戸時代から酒や酢の醸造業で栄え、今も半田運河周辺に黒板壁の醸造蔵が立ち並んでいます。南吉童話に、主人公が酒の滓を町の酢屋に運ぶ「和太郎さんと牛」、樽職人の子を描いた「狐」などがあります。日本でも五指に入る大規模な半田赤レンガ建物は、明治時代にカブトビールの製造工場として建てられました。

■南吉顕彰の歩み

死去から5年後の昭和23年、安城に第1号の顕彰碑が建立されました。昭和28年から南吉童話が教科書に採用されはじめ、南吉の評価は高まっていきます。昭和36年に新美南吉顕彰会が発足し、『新美南吉代表作集』を発行。休止状態だった時期を経て、昭和61年には顕彰会が再発足し、半田市が生家を復元したり、「新美南吉童話賞」が設立されたりと、活動が活発化していきました。

昭和63年に新美南吉記念館建設計画が発表され、翌年半田市は「ごんぎつねの里・岩滑」整備事業計画を立てました。記念館開館前年の平成5年には、新美南吉事業連絡協議会「ごんぎつねの会」が発足しました。

平成25年の生誕100年を前に、平成22年に「新美南吉生誕100年記念事業実行委員会」が発足。平成25年は一年を通して、生誕100年を祝う50以上ものさまざまな行事が行われました。

■新美南吉記念館について

平成6年開館の、半田市直営の館です。併設の童話の森は、「ごんぎつね」に登場する伝中山城址です。

記念館ではさまざまな市民グループの皆さんが活動しています。「ガイドボランティア南吉案内人」は展示室の解説や文学散歩の案内。「歌とお話の会」はギ

ターの弾き語りとストーリーテリング。「南吉童話お話の会でんでんむし」は読み聞かせ。南吉童話「木の祭り」になぞらえて、蛍を育ててくれている「蛍おじさん」もいます。その蛍で、毎年6月に「南吉さんの蛍まつり」を地元企業の協力を得て半田市観光協会が開催し、二晩で1500人もの人が訪れるイベントになりました。他にも、

○生誕祭宵祭り（盆踊り唄保存会、山車組、ガイドボランティア）

○生誕祭「南吉さんの日」式典（半田中学校合唱部、洋菓子店（バースデーケーキ作成）等）

○ごんの秋祭り（半田市観光協会、岩滑お助け隊等）彼岸花300万本を見に2週間で10万人の人が訪れ、1万人が記念館に入館。

○貝殻忌【命日】（私立幼稚園園児の合唱）

などを、市民、団体、企業と連携して開催しています。

記念館をめぐる市民活動としては、「新美南吉顕彰会」「矢勝川の彼岸花を守る会」などがありますが、平成26年から新たに「NPOごんのふるさとネットワーク」が設立され、館内のカフェ&ショップ「ごんの贈り物」の運営や、加工品などを販売する「ごんの足跡」「じば工房」の運営統括、童話の森をきれいにして観察会やイベントを行う「童話の森プロジェクト」などの活動を行っています。

貝殻忌（3月）

カフェ&ショップ「ごんの贈り物」

■今後の課題

半田市では、小学校区単位で自治区活動を継続させようとしています。モデルケースとして、岩滑区が同じ小学校区の半田1区と共同で事業を行うための検討会議を開いていますが、記念館はそこにオブザーバーとして参加しています。昔から地域の結束の強かった岩滑区ですが、近年その力が落ち始めています。岩滑は市の景観形成重点地区に指定されていますが、記念館が開館した頃に比べて都市化が進み、童話のふる里らしい景観が失われつつあります。そこで「南吉」をキーワードに見直しのためのワークショップが開かれていますが、そこにも記念館はオブザーバーとして参加しています。

「南吉を活かしたまちづくり調査特別委員会」は、令和2年度に半田市議会が設置した特別委員会です。令和5年に生誕110年を控え、市民が生涯にわたって南吉に親しめるよう、また、南吉を通じて市民に豊かな心と行動力、郷土への誇りと愛着を育んでもらうため、活動しています。

■おわりに

南吉作品が郷土性豊かで地域の絆を描いていること、死後に評価が高くなってきたことが、地元での顕彰活動の原動力となっています。生誕100年記念事業のあと、それまで南吉顕彰を支えてきた団体の機能縮小や解散などがありましたが、新しい団体の設立や新しいイベントの開催もあり、市民による多様な関わりが継続しています。南吉生誕110年をどう迎えるか、市民の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

第3回 小川未明における〈相互扶助〉

講　師：**小埜裕二氏**（上越教育大学教授・小川未明文学館専門指導員）
開催日：令和3年11月13日（土）
会　場：高田城址公園オーレンプラザ

■はじめに

未明の童話や小説を読んでいくと、〈相互扶助〉が一つのキーワードとして浮かび上がってきます。未明が影響を受けた本に、クロポトキンの『相互扶助論』があげられますが、この思想が未明文学の重要な背骨になりました。

■大杉栄との出会いと影響

大正2年、大杉栄が『近代思想』に未明作品を紹介し、二人は知り合いました。影響を受けた未明は、クロポトキンの著書を読み、感銘を受けます。翌大正3年に発表した「眠い町」は、社会問題を扱った童話です。大杉の影響を受けて未明は社会に目が開かれていきました。その一つの表れとして「眠い町」は書かれたように思います。

社会問題を深く考えるようになった未明は、大正9年「日本社会主義同盟」の発起に参加します。大杉とともに機関紙『社会主義』の編集委員を務めました。

■クロポトキン『相互扶助論』

クロポトキンは、ロシアの政治思想家・地理学者です。無政府主義の理論家として著作・宣伝に努めました。『相互扶助論』（1902年）は、相互に恩恵のある協力関係、互恵性（相互扶助）が生物環境においても人間社会においても果たす大事な役割を、過去から現在にかけて明らかにした内容の本です。

イギリスの水難救済会のことを書いた『相互扶助論』のエピソードは、未明童話「黒い人と赤い橇」（大正11年）に強い影響を与えています。

〈坑夫や漁夫の村落には、鉱山や海上の勇気の伝説が生きてゐて、それが詩的後光をさしてゐる。然るにロンドンの雑駁な群集の中に何んの伝説があるか。其処に共通の伝説があり得るとすれば、それは文学によつて創造されたものでなければならない。〉という一文を読んだ時、未明は自身の使命を自覚したのではないでしょうか。相互扶助の意識が近代の人には薄れており、自分が文学によってその伝説を作っていくという自覚です。文学者としての使命の自覚が、大杉栄と小川未明の生死の分かれ目になったように思います。大杉は社会革命へ、未明は文学の世界へ入っていきました。

■クロの上には青いそらがある

秋山清『アナキズム文学史』（昭和50年筑摩書房）に、昭和3年頃の未明と秋山の交友エピソードが載っています。〈未明は）「クロポトキンを考えるとね、クロの上には青いそらがある」というようなことをいった。（中略）未明の「クロポトキン云々」は如何にも子供っぽかった。〉

秋山清は未明の当時の考え方に否定的です。しかし未明は、クロポトキンの考え方に大事なものがあると考えました。未明は文学者として「青いそら」を思い描くことができる人でした。

未明は弱い者、人間の自由を大事にしましたので、それを守ろうとするアナキストの文学グループの活動に参加しました。未明は大正15年に〈童話作家宣言〉をしました。その背景に、社会主義への弾圧から逃れようとする思いがあったと推測されることがありますが、未明は、社会変革は政治革命ではなく、相互扶助の精神による人間変革を行うことだと考えました。昭和に入ってからも未明は、日本無産派文芸聯盟、新興童話作家聯盟、自由芸術家聯盟等に参加し、アナキストとしての文学運動を展開します。それが未明の社会主義思想の実践でした。

■小川未明の作品への影響

相互扶助の考えは、小説にも童話にも表されています。小説「仮面の町」（大正13年）では、相互扶助をしない人達の話が書かれています。

未明が『相互扶助論』の思想を自身の文学の核に据えたのは大正10年頃のように思います。大正11年1月に発表された童話「黒い人と赤い橇」「雪の上のお爺さん」「春になる前夜」はいずれも遭難をモチーフとした童話で、『相互扶助論』の影響が見られます。「月夜と眼鏡」「星の子」「翼の破れた鳥」「般若の面」「南島の女」「蜂と子供」等も、大正期後半以降に書かれた相互扶助をモチーフにした童話です。相互扶助の心をもった人間を育てることが社会を変え、未来を築くことにつながると未明は考えました。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991年（平成3）に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

2021年度で第30回目を迎え、これまでに延べ14600編を超える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

第30回小川未明文学賞贈呈式

第30回小川未明文学賞大賞受賞

島村　木綿子さん

（大賞作品「カステラアパートのざらめさん」）

＊受賞のひとこと＊

この度は素晴らしい賞を、ほんとうにありがとうございました。

受賞した作品は、列車の窓から、カステラに似た外観のアパートを見たことがきっかけでできました。ここを舞台にした物語を書きたいと思いましたが、なかなか良い構想が浮かばず、長いこと胸の中で温めるだけの日々が続きました。それがある日、「カステラアパートのざらめさん」という題名が頭に浮かび、そこから物語が動き出し、完成させることができました。

私は子どもの頃から生き物が大好きで、家族や友人とは別に、身近な生き物達にも心を支えられて生きてきました。生き物への想いは、今も物語や詩を書くうえでの大きな原動力です。

この作品の中でも、登場人物のざらめさんやこのみ、お母さん、それぞれにちょっとずつ私の想いも語ってもらっています。

物語を読んだ子ども達が、いろんな人や生き物がそばにいるって素敵だな、楽しいなと感じてくれたとしたら、作者としてこんなに嬉しいことはありません。

書くことに正解は無く、いつも「これでいいのだろうか？」との迷いはつきません。今回の受賞はそんな私の背中を、「いいんだよ！」と力強く押していただけた気持ちです。選考委員の皆様のお言葉を励みに、これからも一作一作、大切に書いていきたいと思います。

第31回募集要項

◆募集作品

①短編部門（小学校低学年向け）

…400字詰め原稿用紙20枚～30枚

②長編部門（小学校中学年以上向け）

…400字詰め原稿用紙60枚～120枚

・いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表のオリジナル作品。各部門同時応募も可。

・パソコン等の場合はA4用紙を使用。

・表紙に題名、筆名と本名（ふりがな明記）、年齢、性別、職業、郵便番号、住所、電話番号、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記。

・原稿用紙2枚程度のあらすじを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問（ただし、当文学賞の過去の大賞受賞者は除く）

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

2022年10月31日（月）（当日消印有効）

◆入選作

・大　賞（賞金100万円・記念品）

※学研プラスから単行本で刊行されます。

・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

2023年3月上旬（予定）

＊詳細は小川未明文学館ホームページをご覧いただくか、左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-8601　新潟県上越市木田1-1-3

上越市文化振興課内

「小川未明文学賞担当」

（「」部分は朱書き）

TEL　025-520-5628

FAX　025-526-8363

E-mail　mimei@city.joetsu.lg.jp

未明童話の世界を感じよう　11月28日（日）

グループ空「夏の晩方あった話」

「小川未明フェスティバル2021秋編」の関連イベントで、フェスティバルのテーマである「夏の晩方あった話」を、パネルシアターで楽しんでもらいました。

会場：上越文化会館市民サロン

出張おはなし会

未明童話の会【大手町小学校 12月３日】

６年生52名が参加してくれました。

未明の紹介、「いちじゅくの木」「きょうだいののねずみ」「殿様の茶わん」を、とても静かに集中して聞いてくれました。

お話の会うさぎ

【直江津南小学校放課後児童クラブ ８月２日】

夏休みの一日、暑さ・新型コロナウイルスに負けず、とっても元気な子どもたちでしたが、お話が始まると静かになり興味深く聞いてくれました。

研修会　11月16日、12月21日

令和3年度

未明ボランティアネットワーク
研修会記録

未明ボランティアネットワーク

令和３年11月16日

今年は未明生誕140年です。そこで令和３年度の研修は、未明に関する碑や像などについて調べました。

グループごとに３、４か所、合計18か所について調べ、場所（周辺の様子）、碑等の説明、関連事項、写真等にまとめ、発表・話し合いの会を開き、共通理解をはかりました。

また、２つの他県にある碑（岩手県、岡山県）や、春日山神社にある未明童話文学館等について知ることができました。故郷の風土、風俗に深い愛情をもって数多くの作品を残した未明。ふるさとをいつくしみ続けた文学者の功績をたたえ、その足跡を偲び、数多くの碑を建立した人々の、未明への思いを改めて実感することができた研修会でした。

（シャーフの会）

出張おはなし会、会員加入の連絡先

上越市文化振興課

上越市木田１－１－３

TEL 025－520－5628

FAX 025－526－8363

のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.18

発　行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2022年５月31日

令和３年度の活動

- 小川未明文学館おはなし会…全21回、延べ参加者223人
- 出張おはなし会（市内小学校、放課後児童クラブ）…21か所、882人
- 特別展おはなし会（文学館市民ギャラリー）…参加者34人
- 会員の研修会（高田図書館第１会議室）

令和３年度上越市表彰を受賞　（教育、体育、芸術、文化功績）

未明ボランティアネットワークは、永年文化の向上に尽くしたものとして、令和３年度の上越市表彰を受けました。

未明ボランティアネットワークは、平成３年（1991）小川未明文学賞が創設されるのに合わせ、上越未明童話の会として発足しました。その後、未明ボランティアネットワークと名前を改め、高田図書館内に小川未明文学館ができてからは、月２回のビッグブックシアターでのおはなし会、学校や放課後児童クラブへの出張おはなし会を主な活動としてきました。

その功績が評価され受賞しました。（岡本会長）

特別展おはなし会　10月24日（日）

作品名	担当グループ
①「こうさぎとははうさぎ」	お話の会うさぎ
②「雪だるま」	シャーフの会
③「よっぱらい星」	グループ空
④「月夜とめがね」	未明童話の会

諸橋精光さんが描いた、超大型紙芝居『月夜とめがね』の原画が展示されている会場で、全グループが発表しました。

文学館おはなし会　毎月第２・第４日曜日14時～

シャーフの会　６月13日

パネルシアターで「水車のした話」、ＯＨＣで「月夜と眼鏡」、大型絵本等のお話をしました。親子連れが聞いてくれ、とてもなごやかな雰囲気でした。

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力のお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集を行っています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただけると幸いです。

【主な収集資料】

1．特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2．図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3．参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

令和４年度　小川未明文学館カレンダー

５月	小川未明文学館こども祭 ５月14日(土)
６～８月	朗読研修会 ６月25日(土)・７月９日(土)・７月16日(土) 童話創作講座 ７月24日(日)・８月27日(土)・８月28日(日)
10月	小川未明生誕140周年記念展 会期：10月８日(土)～12月25日(日) 第31回小川未明文学賞募集締切 10月31日(月)
10～12月	文学館講座（全３回）
１月	未明童話アニメーション上映会
２月	小川未明文学館バックヤードツアー
３月	第31回小川未明文学賞贈呈式（上越市）

＊通年で所蔵品を紹介する特集展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会
＊毎月第２・４日曜日の午後２時から文学館にて実施
＊学校等での出張おはなし会を随時実施

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、延期または中止する場合があります。

小川未明文学館　利用案内

◆開館時間
火～金曜日　午前10時から午後７時（６～９月は午後８時まで）
土・日曜日、祝日　午前10時から午後６時

◆休館日
毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）・祝日の翌日・館内整理日（毎月第３木曜）・資料整理期間・年末年始（12／29～１／３）

◆入館料　無料

◆問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町８－30（高田図書館内）
TEL　025－523－1083
FAX　025－523－1086
URL　https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/minei-bungakukan/

発行　上越市文化振興課
〒943-8601　新潟県上越市木田1-1-3
TEL．025－520－5628 ／ FAX．025－526－8363